

# 合田強の『医道聞書』の解題と翻刻

板野 俊文

香川大学

## はじめに

本稿では、江戸中期の讃岐の医家であった合田強<sup>①</sup>（一七二三―一七七三）の著した『医道聞書』について述べる。

翻刻に入る前に、合田強の略歴と『医道聞書』について解説する。

合田強は享保八年（一七二三年）、讃岐国豊田郡和田浜生まれ（現香川県観音寺市）。父は合田伝右衛門吉盤。名は強、字は千之、通称求吾、号は巨鼈、鼈山。幼少の時、合田又玄、高橋柳哲について医を修めたが、充分ではないと思ひ、宝暦二年（一七五二年）二月、二十九才の時から二年間、京にて松原一閑齋<sup>②</sup>に医と儒を学んだ。さらに、三十三才の時、宝暦六年丙子（一七五六）正月より姫路より京都を経て江戸を訪れ、それぞれの場所で当時の一流の医家について医学修業を行った。これは途中の中断はあるが四年間におよんだ。その後、三十九才の時、宝暦十二年（一七六二年）長崎にて通詞の吉雄耕牛<sup>③</sup>・吉雄蘆風<sup>④</sup>に学んだ。安永二年四月（一七七三年）五十一歳で死亡。

強はそれぞれの修行中に講義録といふべきものを残した。京都の松原一閑齋の塾におけるものが、『醫道聞書』であり、次に三都（姫路、江戸、京都）で学んだものも『醫道聞書』と名付けている。つまり、略字で書く『医道聞書』は二種類ある。暫定的に上巻、下巻と名付ける。下巻のほうは原本が残っており、末裔によって香川県立ミュージアムに寄託されている。またその複写本は香川大学附属図書館医学部分館と、香川県立図書館に所蔵されている。一方、写本は上下巻ともに、鎌田共済博物館に所蔵されているが、上巻の原本は所在が不明である。鎌田本は昭和五年前後に、末裔である合田操氏が福家利三太氏に写本を作らせたものである。

その後、長崎における滞在は数か月であるが、講義録は五巻におよび、それぞれ巻ごとに名前を付けている。（紅毛醫述 卷一、紅毛醫言 卷二、西洋医述 卷三、四、五）これらについては、筆者らが翻刻<sup>⑤⑥</sup>を行っている。さらに要約した『紅毛醫言』に関しては、口語文に直したものを報告している<sup>⑩</sup>。これらは『解体新書』発刊に先立つこと十

二年前であり、当時の最先端の阿蘭陀医学の紹介本である。

一方、今回翻刻した『医道聞書』は、当時の古方派の大家である松原一閑齋、望月三英<sup>(1)</sup>、山脇東洋<sup>(2)</sup>、吉益東洞<sup>(3)</sup>、渡邊毅<sup>(4)</sup>等に学んだ講義録であり、この中には、他に有馬涼及<sup>(5)</sup>、並河天民<sup>(6)</sup>等の逸話も書かれている。このように古方派に関する多くの名家が描かれているが、論文検索を行うと、一部が引用されているのみである<sup>(7)</sup>。その点からしても、全文を翻刻することに意義があると考ええる。

## 凡例

- 一 この書は『医道聞書』である。
- 一 今回、翻刻したのは、上巻は鎌田本であり、下巻は香大本である。
- 一 本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻した。また見え消しは原文に従った。
- 一 論文の筆者の注は（ ）を用いて書いている。また不明な漢字も（ ）を用いている。「」は写本の筆者の福家利三太氏説明である。
- 一 解説不明な部分は□を用いて示した。

## 翻刻

(表紙)

### 医道聞書

夫傷寒論ハ傷寒ヲ療スル書 又雜病ヲ通治スルノ書也 金匱要略 傷寒

論トモニ雜病ノ書ニシテ仲景ノ療治書也<sup>[?茲所 細字三字不明]</sup> 然ドモ晋以来五行ノ道理ヲ以テ解シテ今日療治ノ為ニナラヌ事多シ 其上脱簡衍文多シテ取マシキ言數々アリ 平脉法辨脉「?二字位不明」ナト仲景ノ意トハミエス 王叔和ナドノ添タル者ト見タリ 金匱要略ノ中ニ千金ノ方 或ハ外臺ナト、有ヲ見テ 後世偽書ト云者アリ 左ニハアラス 是ハ仲景ノ方ノ千金外臺ナトニ出ルアルヲ見テ金匱ヘ引キテ書載タル物也 成程是ハ異雜多キ書也 傷寒論ハ前後ノ偽篇ヲ拔テ見レハ大概正シキ書也 別テ桂枝一麻黃湯 白虎 大小苳越婢諸承氣 抵當ナドハ殊之外大切ナル方ニテ論治煎服モ委曲詳悉ナル事トモ也 ソレ故是ヲ熟読玩味スレハ深意アル事ナル程ニ何トソシテ我物ニナル様ニ見ルヘキ事也 要略ノ中ノ薯蓣丸一物瓜蒂丸ナドハ後世ノ方トミヘタリ 仲景以後ノ書ニテハ千金方 外臺秘要<sup>[本事方]</sup>○ナト古方ヲ考ルニハヨキ書トシルヘシ 拟療治ト云ハタトヘハ家ノ掃除ト同シ心也 番近カ木ヲ撰 造管効ナルトイヘドモ一月二月スレハ早ス、ホコリタマリテ由断ナラズ 氣ヲ付掃ハサレハ家ノ疵ニナル者也 人ノ病モ其如ク折々腹内ヲ掃除サセレハ惡物滯テ害ヲナス也 其惡物サヘ拂盡スレハ自然ニ精神スコヤカ也 仲景ノ補法ノ道理ヲミルヘシ 大黃麤虫丸ノ主治ニ云 五勞虛極羸瘦云々 ○緩中補虛ニハ大黃虫丸之ヲ主ルト云テ方内ニ大黃虫水蛭ナド後世畏ル、破血瀉下ノ薬ヲ用ユ 是ヲ用テ病ヲ去レハ腹内スコヤカナリテ自然ニ平復ス 是一旦攻ルニ似タリトイヘドモ実ハ補法故ニ上ノ如ク主治ヲ云シ也 後世ノ補ト云ハ補中益氣六君子人參養營湯ナト、云テ白湯ヲ飲如キ者ニテ虚人ヲ補ト思テヤ、モスレハ廢人極虛ニ独參湯ニテ死ヲ待事天下滔々トシテ皆

是也 シカノミナラス医ト名カ付ハ皆仲景ヲ信スル事ハ方ノ祖ト覺テイ  
 レトモ仲景ノ本意ヲ汲テ其方ヲ用ユル者 唐ヨリ後其人ヲ不見 今 仲  
 景ノ書コトノク不傳トイヘドモ残り有 尠ヲ撰ヒ探テ心ヲ尽シ 実事  
 ニカケテ試バ歴々トシテ顯明ナル事ナルベシ 方中 加減 分量 猶又  
 正ク古方ヲ守ルベシ 守ラザレバ法ヲソムキテ効モナシ 其證ハ桂枝ニ  
 越婢一 湯麻黃加木湯麻黃各半湯ナト合量ニテ名付タル事玩味スヘシ  
 清韓トモニ古方不レ用トイヘドモ分量ハ正シク守ル事也 只我日本ノミ  
 サジニテ調合シテ分量不分明也 近年 後藤佐一三サジヲ作トイヘドモ  
 是モ大概ヲ云テ未詳 ソレ故今小秤ヲ以テ一味ノ掛合ス事也 古方ノ  
 内 大棗 石膏 杏仁 附子 梔子 諸虫ノ類分量不詳トイヘドモ 是  
 又餘藥ノ正シキ功ヲ以テ考ヘミレハ大概知ル事也 分量ヲ正シク守ル事  
 ハ松原先生ヨリ始ル 其功大ナル哉

一 湯丸散ノ緩急ヲ論スヘカラス 強テ云バ見ニ湯尤効速也 散是二次  
 丸ハユルヤカニ効ヲメクラス物也 然ハ煎湯バカリニテヨカルヘケレド  
 モ大病アル人煎湯大劑ナレハ飽テ多ク飲事不可 其時ハ丸散ヲ兼服シテ  
 効ヲ速ニスルノ意也 吐シテ不受ニハマツ湯ニテ胸腹ヲムスヘシ 其上  
 不受ニハ七九十一ノ推ナトニ灸スヘシ 大壯ニシテヨシ 痛ヲ覺レハ氣  
 少開ク故大方藥ヲ受者也 又煎湯不受人アリ 丸ヲ不受人モアリ 又一  
 向湯丸散ナドニ不受人アリ ソレノ時ノ宜ニ從ヘシ  
 一 灸ノ効又著シ 勞瘵ナトニ早く灸スヘシ 甚効アルモノ也 然ドモ  
 他病ノ上衝發熱ノ症ニハ灸スレトモ効ナシ 扱穴法脾膵ナラハ十一ノ骨  
 上ノ旁ニ灸スヘシ 惣シテ背骨兩方ニタレテアル物故節下ヘ灸スレハ骨  
 上ニアタル故也 兩旁ヒラキモニ行通ヨリ少シ内ヘ入テ分肉ノ陷中ニ灸

スヘシ 香川太沖ナトノ点ハ餘リセハク又三寸ヒラキハ猶廣其中分ニヨ  
 キ所アル也 艾壯隨分細ク米粒ホトニスヘシ 嘗テ枕ニ灸シテミケルニ  
 細壯百ト大壯ナト灸シクラヘケルニ枯木ナレドモ中ヘ入ル事細壯ハルカ  
 ニ勝レリ 大壯ノ方ハヤケタル上ハキヒシク見ヘケレドモ中ヘ入事スク  
 ナクアリシト先生仰ラレキ

一 醫道ハ仁術也 只孝弟忠信ヲ旨トシテカリソメニモ利欲意必固我ヲ  
 除クヘシ 今ノ医意必固我ヲ離ル、事不叶 其上渡世ノ富貴ヲムサホル  
 ノ心アリテ行住座臥利欲ノミヲ事トスル故 病人ヲ治療ストイヘドモ富  
 貴ニヘツライ貧家ヲ疎略ニス 是第一ニ謹ムヘキ事也 只信實ニ心ヲ盡  
 セハ治療モ名人ニナラル、トシルヘシ 且惜ムヘキハ医ハ本ト病ヲ治ス  
 ル者ニシテ保養延壽ヲ專ラニスヘキ任ニハアラス 保難(養)ハ常ノ事  
 ニシテ包丁人ノ可知所也 唐以來仙術ヲ交ヘテヤ、モスレハ仙方延齡ヲ  
 第一ニシテ論シテ仙医一同ニ入タリ 是千金方ヲ考テ可知 孫氏ハ老莊  
 佛ヲ学テ仙術ヲ事トセシ人トミヘタリ 医ヲ勤ル事ハ大樣切ナレドモ我  
 好ム所ヲ以テ医道ヲ談セシ故後世其弊拳テカソヘカタシ

### ○診病人之法

△後藤子ハ始仲景ノ方ヲ用シカドモ或ハ胸膈ニナツミ或ハ能ヲ定ルニ本  
 草ヲ本トシテ仲景ノ方ハ本草ト違タル事ヲ不知 甘草大棗桂ナドハ和人  
 ニハナツメト覺ヘ心下痞ニハ木香縮砂枳實厚朴三稜莪木ヲ用テ半夏ハ逆  
 氣ヲ鎮ムル事ヲ不知シテ痰ヲ和スルト覺ヘテ病ニ中ラヌト心得テ用イス  
 ソコデ熊胆 温泉灸治ヲ本立トシタトミヘタリ  
 △傷風之名目古代ニナシ 風ニ中ト云 寒ニ傷ト云ハ風ハ人サハリナケ  
 レハ中ル事アタハス 寒ハ人丈夫ニシテサワリナシトイヘドモ是觸犯ス  
 時ハ傷ラレテ傷寒トナル也 雖然今療治ニ於テハ多不違 尤惡風スル者

ハ中風也 桂枝湯ニテ多クハ解ク 久病ニハ至ラヌ也 寒トイヘハ少傷トイヘドモ久シテ愈カヌル物也 ソレ故古人中傷ト分タ者也 風寒ノ違アル事可知耳

△温泉ト云者ハ外ヨリ温ムル者故ニ内ニ毒氣アル物ニハ必可斟酌 毒氣盡テ後暖順スルニハヨキ者也 然トイヘドモ固冷類ノ温テ順ス事ヨキ病ニハ必ヨキト可知

△今云中風ト云者モ本氣血虚シタル上ヘ風ニ中リタル者トミヘタリ故ニ風症アラハル者也 由テ藥モ小續命ナドヲ用レハ治スル者ニテ可知

〔添付した部分〕

梅毒ノ病症ヒ仰下到承知候 大便下兼候ハ、芒硝別ニ壹錢バカリ御加入尤大黃モ可用 大解毒本方ニ硝黄別ニ御加候得ドモ通者ニテ候 毒氣強ガ故也 兼テ神祐丸御兼用可然候 方ハ如神丸一劑ノ内ヘ輕粉壹錢加ユ丸法如レ如神服法亦同如神猶亦追々可被仰越候

▲ホイロニ掛 温弱ナル時ニ刻

人參 和參味苦故是良 此苦味ニテ開胸進食

仲景ノ參ヲ用ルハ後世ノ能トハ大ニ違也

今ノ韓參製法シテ渡ス故ニ升陽ノ効アリテ開胃口ノ効ナシ 韓參モ生

物ナラハ成程ヨカルヘキカ 芳野人參直根ト云物良 尾張參見事ニテ上品ナレドモ製法スル故不好 開胃口止 上逆和痞

葉選

鶏肝 鶏肉解毒之効尤甚 男ヨリ婦人ニ別テヨキ也

寒中ニ採生 少乾シ為末大黃等分為丸

木 漢蒼木ト云 氣味効能共ニ良

白本トアルニ皆是ヲ可用

芍薬 毒ヲカル心アリ 今藥店真ノ芍薬ト呼物良

ヨホト強キ葉也 殊之外 腹中ヲユルメル物也

桂麻ニ入テ汗ヲヨク発スル也

芍薬ハ邪氣ヲ和シテ汗ヲ出者也

烏双ノ内ニテ茎ノナキ丸キ附ヲ可採 烏双附子ト可ニ物

附子 和ノトリカフトヨシ 草烏頭ト云

漢附甚鹹シ 是以塩ナド久浸ナラン

水ニテ塩ヌケハ味和附ヨリ遙ニヲトレリ

故ニ和ヲヨシトス

附毒ニ中リタルニハ甘連一

乾姜 近年製スル丸干姜良品也 片乾姜石灰製ナドハアシ、不堪用

冷タルニハ乾姜ヲ用 吐ニハ生姜ヨキ也

鼈甲 上部ヲメクラス効甚シ

防風 上部ヲメクラス効甚シ

川芎 豊後ノ角川芎ト云モノ香烈ヨシ

是三焦ノ瘀血ヲメクラスモノ也

大黃大防小芎小 是ヲ芎黃湯ト云 上焦ノ瘀血ヲ去

地黃 霜月ニ採土中ニ生テ用ユ

汁吐血下血衄ナドヲ治スルニ一合程用ユレハ早止

シメリスナヲ箱ニ入地黄一ナヲへ置テ砂ヲ入其上へ又入、スル也

腐ル物也 折々砂ヲカユヘシ

一名赤龍皮又苦常

土骨皮 クニキノ皮也 採テ刻用ユ 発毒ノ効イチシルシ故ニ梅瘡

初発ニ仙遺ニ替テ用

桃花 水気ヲ下ス効甚シ 大便ニトル也

桃花湯外臺ニ出 千金ニモ方法アリ  
脚氣門ニ 十九ノ卷

香豉 豆ヲ煮 苞ニシテ室ニ入四五日シテ取出乾

和ニ云納豆 塩ナシヲヨシトス 豆ヲクサラス

粉 カンサラシ粉 コメノコ

仙遺 ヌルキ物也 梅瘡ヲ解スル者也 外ノ淋癬ニ用テハ効ナシ

皮付ヨキ也 ケツリタルハ水ニ浸シタル故功猶ウスシ

蝮蛇 癘風結毒ヲ治スル効アリ

直ニ可採

右ニ同

檳榔 開ク効アリ ソレ故大便ヲ通

檳榔湯

石膏 胸中ヲ滋潤シ渴ヲトム

礎石ハ石膏百目ニ連四錢也 霜石ハ石膏百目 霜三分也

今ノ石膏ハ甚ヌルキ物也 地漿ト云

石膏ヲ嫌人アリ 医家ヨリ煎シテヤレハ可服也

大棗 橘皮竹茹一二十枚入テアルニテ可見也

欲熟棗ヲ甑ニ入蒸シ少色付タル時取出日乾肉骨ナド刻ウルヲ

ス物也 噦ヲ治スル物也 是一味ヲ煎シテ噦ヲ治スル事妙也

先生ノ家傳也

生漆 セシメウルシ キウルシ極良也

起癩丸 病ノ凝堅リタルヲ引動シ表發スル効甚勝タリ 若漆毒ニ

中リタル者ハ麦門加「麦門加三字字体不明」石ナトヲ可用△瘀血アル

者ニハ用テ惡物ヲ可下

黄芩 唐ヨシ 解熱ノ効黄連ニハ劣レリトイヘドモ辛味ヲ帶ル故ニ

胸膈ヲ開ク功勝レタリ

真花瓜ノヘタヲ莖一寸バカリ付テ採用ヘシ

瓜蒌

瓜ノサナゴ也 瓜中ノ⊗ヲ云

瓜子 サナゴ

マクワウリノタネ也

熊膽 琥珀出ヲ上品トス 其能甚胸膈ヲ開物也

肝ノ皮ハ薄物ユヘ上ヲ紙ニ包ツリ乾也 氣モレ安シ

大戟 甘遂 芒硝 茴香 可封包

薤白

生ヨシ

河膠 製牛皮百目鍋ニ入 水三升入 武火ニテ煎 水減又水入水減

三番水入煎シ六七合ニ煎シドロ／＼トシタル時布袋ニ入絞リ

其汁ヲ鉢ニ入陰乾シ一時計シテ少カタマリタル時包丁ニテ細

ニ刻 乾シ用ユ 又煎藥ニ入一沸シテノムモヨシ 又二番モ

## 翻刻

(表紙)

鑿道聞書<sup>(18)</sup>

(表紙裏)

宝曆六年丙子正月

歴姫路過京師至于東

都矣故三處之醫言

## 醫術聞書

望月三英曰医道ハ心ヲ精一ニシテ學サレハ其道ニ達スル事ナラス者也  
 医ハ下位ニ居テ治ヲ施セバ志達シヤスシ 上位ニ上リ官医ニ為テハ中々  
 志ハ通りカタシ 我意ヲ述ント欲スレハ人ノソシリヲマネキテ思マ、ナ  
 ラスト也

○久シク易簡方ヲ開板シテ海内ノ重器トセントスルノ志テ易簡方ヲ書写  
 シテ家藏スレドモ正本ヲ得テ正ントス 九州ヲ尋レドモ得ス 雒ノ甲賀  
 通之易簡ヲ秘スルノヨシキ、テ門人ヲ以テ是ヲカリ考合シテ開板ス 官  
 庫ニ續易簡方アリ 是モ開板ヲ願ヘドモ未能 去冬九州ヨリ易簡方ト云  
 書ヲ持參セリ 其書六卷アリテ王碩カ書ニアラス 清朝ヨリノ新渡ニシ  
 テコレ杜選ノ書也

○又久ク外臺秘要ヲ開板セント思志アリシニ山脇氏ヨリ官庫ノ外臺ヲ拜  
 借シテ開板シタキヨシ申来テ上ヘ申上是ヲカリテ終ニ山脇ノ志ヲ達シ書  
 成テ 禁庭東都ニ獻ス 我ヨリ御本丸ヘ申上 褒美トシテ時服銀子ヲ下  
 シ玉フ 吾ニモ外臺一部ヲヲクレリ

右ノ煎法ニシテトル也

膠□ナドニハ後ニ入テヨキ也 温経ニハ始ヨリ入テヨシ

桂茯ハ火ヲシメシ逆氣ヲシツメル也 賁豚ニ用

温粉 温粉之法 出于本事方入白木薑本白芷ナド方也 然ナド只粉

ヲ用モヨシ

新絳 アカネソメ 生生云今ノアカネト云物良 本山ニ茜草トアル

ナリ

緋帛 アカネソメノキヌ 新絳ト同物異名也

膠胎 製法 糯米三升少シフミ蒸飯ニス ヨハキ米ヨシ 麦芽三升

粉ニシテ 手引ノ湯三斗

右ノ餅米ノ蒸飯ヲ能サマシテサテ右ノ手引湯ヲ入麦芽ヲ振カキマ  
 ゼ一夜置也 一時計シテ中ガキ伝テ 又マゼカヘス サテ朝七時  
 ニ起 敷布ノ袋ヘ入シボル也 二番右ノシボリ滓ヘ手引湯六升入  
 麦芽三合程入カキマセ暫シテ又シホル也 右一番ト二番ト合シテ  
 釜ヘ入ネル也

竹葉

竹葉嫌人アリ 竹ヲ直ニ核<sup>キサ</sup>シ用ユ

熱ノポツホトアルニハ竹ヨリ葉ヲ用ヘシ

鯉魚

鯉魚湯

津蟹

中ニ火通程焼置ヘシ

五味子

朝鮮ヨケレドモ味酸而有 厭人故以和代之雖味薄 効速也

括婁根

西瓜粉ニカヘテ用ル事モ可有

○魯復ト云者ノ作ニ医種子ト云書四卷アリ 神農本經 傷寒論 金匱要略 史記 扁鵲倉公カ傳ノ医 按此四部ヲ本トシテ書タル書ニシテ重寶ナル物也 是モ開板セント欲ス四谷邊ニ和田養悅ト云者此唐本ヲ九兩ニ買テ今廿五兩ニ賣ントイヘドモ未買

○只今江戸中ニ名医ナシ 其中ニ梶原平兵 野呂天民門人元丈 原雲菴山田柳菴ナド古方ヲ本トスルノ志アリ儒者ニハ南郭南暎也 南郭老人ニ成テ人ニ不逢 其上志大宰ト大ニカハレリ 常ニ云今ノ儒ハ中々經濟ニアツカル事ハナラヌナリ タトヘ後世ニ道ヲ云殘セシトテ何ニカセン只詩ヲ詠シ文ヲ書テ心ヲ風雅ニ遊ハシメ面々ノ安心ヲスル迄ナリ

○予カクノ如ク老人ニナリ七十一ニナルトイヘドモ千里ノ志ハヤママス貴公如キノ人遠方ヨリ尋キテ物語ヲスレバ心ヲ樂テヲモシロク覺ルナリト云リ

○京ニハ医儒トモニ書ヲ讀コトヲ不忘 道ニ志ス者甚多シ カフバシク頼モシキ事也 江戸ニハ地ヲ拂テ上下トモニ學問ニ志スモノナシ カナシキ事也

○岡崎ノ儒者ニ樞平兵衛トテ徂徠流ノ儒アリ 此只今ノ人物也

○鳴嶋道行ハ烏丸光榮ノ門人ニシテ哥人也 詩ヲ能作テ博學ノ人也

○朝鮮医問答ト云書アリ 珍書也ミルヘシ

○諸侯ノ中ニハ内藤備前守 大久保伊豫守 只今ノ詩人學者也

△野呂元丈實夫曰麤虫ハ絶テ和ニ不見 瓜蒂ハ唐ニ有ヘシト 年久シク尋シニ未渡 越前ノネツミウリ甚ヨシ○厚朴 和ヨシ○枳殼 唐ハタシカナラス 和ノカラタチト云者 本草ニ能合シテ正真也○土茯苓 和ニナシ 御葉蘭ニ渡リ二種アリ 竹葉ノ方上品也

○和山婦来ト云者同類ナラン 少々功アリ○梅瘡一症ニアラス段々種類アル病也 天民ハ輕粉劑ヲ好テ用ラレタリ○子和カ書ハ古方ヲ本ニシテ汗吐下ヲ行ヒ其術ヲ得テ後ニ議論ヲモウケテ内經五行家ヲ引合テ書述タル者也 只術サヘ精ケレバ議論ハ面々ノ思々也 何レノ書ノ議論モ是ニ同シ

○越前奥村良筑ハ吐方ヲ得シ豪傑也 常ニ衆方規矩燈下集等ノ書モ又ヨリ〳〵是ヲミル 成程ヤサシキ志サシ也○大黃ト云物甚ヨキ者也 和ワルシ 唐ヨシ 兎角医ハ一味ノ藥ニテヨク用イ覺ヘタルカ上手也

△梶原平兵衛カ曰 医ハ中々五年拾年ノ効ヲ積テハ行ヌ事也 廿歳ノ此ヨリ志ヲ起シ數方ノ病人ヲ見テ四十歳ノ此ナラテハ見識モ定リカタシ

○脚氣腫滿ヲ見付テ初テ云出セシハ我也 卅年前脚氣東都ニ流行ス 急ニ變症シテ頓死ス 我合点ユカス 治ヲヤメテ退ク 又六七年ヲ経テ又其症アリ 我モ四支痛ヲ覺フ 氣ヲ付ミレハ浮腫アリ 扱此症ニカカリテハ死症ナリト思テ医書ヲクリシ所ヘ元丈来レリ 脚氣ヲ精ク解タル書ハ何レノ書ソ 丈カ曰 千金外臺也ト云 丈ヨリ外臺ノ寫本ヲカリテ是ヲミルニ我病ト按ニ附合ス 扱ハ脚氣云者也ト初テ知テ二書ノ意ニテ治ヲ加ルニ ハタシテ効アリ ソレ故今ニ至テモ脚氣トサヘ云ヘハ我ニ治ヲタノムコト也 臂痛ニハ赤水玄珠ノ指迷ノ伏令丸ヨク効アリ 半二兩伏一兩風化硝二錢枳二錢是也 灸治又功イチシルシ 灸ハ平生ニスヘテ功ナシ 邪氣アリテ痛所ヲ追テスヘレハ甚効アリ 穴ハ不定 痛所則穴所也

○ヲツボノメシツギ 仙洞ノ御香モチ也 ヲツボハ御坪ノ内也 メシモノヲツグト云心ナラン ○イヨスダレハ吉例ニアラズ 御喪中倚慮ニカ

クル物也

○権中納言トヨム 前中納言トスミテヨム也△正二位 正三位トニゴリテヨム也

テヨム○フチダカト云ハ足ノナキ角キリ重ノ如キ白木也 八寸四分ホドアル○内裏ノ御膳ハステ白木三方也 御椀ハ凡テ白茶碗ノ如キ焼物也

○御玄猪トハ十月亥ノ子ニ天子自ラ取テ頂キ給フ物也 赤白黒三色ノ餅

ニシノブ三葉モミヂ三葉一所ニ紙ニ包ミ奉ル也○御猪子ハ丹波ノセヨリ上ル赤豆ト糯米トヲ蒸テ一所ニツキ合テ四角ノ匣ニ入テ毎年二度三度奉ル也 此匣ヲ直ニノセモチト云也○亥ノ子古歌ハ

神無月志くれの雨の度ことに 一つおもふ事かなひつゝ、く

此歌ヲ天子ミツカラ三ヘン唱テ御衣ノ袂ヲアケテキネヲトリツクマ子ヲスル也

○西ノ丸御發明成ヨシ堀田登城シテ椽側ノ御刀ヲ褒美セシニ相模ハ刀ヲ望ムソウナ可被下トテ下サレシ也 又大岡登城セシ時碁ヲ打テ見タシ本因坊ヲ召テクルシカルマシキヤ 大岡曰 彼ハ下賤ノ者也 イカ、退テ工夫スヘシト申上シニ答仰セケルハ父君ニハ能大夫ヲ召 是ハイカナルコトソト 大岡閉口ス 又仰ヤケルハ此事本丸表ニテ沙汰スマシキト被仰キト也

△姫路 加藤宗因曰 夫医トナラント思人ハ一心ヲスヘテ病根ヲ委ク見ヘシ 眼病外腎(かすみ目)ニハ洗葉スヘシ 斬鍼ト云ハ仕易キ者也 内葉金瘡ニ同キ故也

△熊膳ノ毒ハ蕎麦殻ノ灰汁ニテ洗ヘシ△越後ノキスハ油ツヨシ鯛ヲ飼スル故也 鱸ハ油薄シ土地ノ異也

△姫路 志賀委心曰 病人ヲ見ニ術アリ 病ヲ治セント不レ可レ思 病因ヲヨク考テ何病ニ変セン 幾日ニ治セン 幾日病ムヘキカ 幾日ニ死スヘキカト工夫スヘシ 而后病ヲ見ルコト目中ニ瞭然ナラン 予一人ヲモ治セシ事ナク 又一人モ殺セシ事ナシ 只我私意ヲ以テ病人ヲ見ル故ニ此薬ニテハ此病ハ可治ト思ニ由テ上手ニ至ラヌ也 病ハ変也 薬方ハ常也

○思フニ世上ニ醫ナシ 世医ヲ見ニ只六君異功十全益氣ノ外ニ不出 是ラノ薬功驗ナキ物ナレハ療治ト云物ニアラス療治ニ非レハ皆人ヲ殺ス也 畿内 古方ヲ云者十人ニ六人ハ殺セトモ 三四人ハ人ヲ助ル手段アリ 是醫ト云者也 今ノ天下 皆々碌々ノ徒也 別テ仕官ノ医ハ生業ヲ旨トシテ居ル 故ニ甚慶医也 哀ヘシ 上ニ云如ク只病人ノ死生ニ氣ヲ付テ治ニ心ヲ付ヘカラス 半年ニ不足シテ上手ニ至ルヘシ

○金山ヨリ出ル鼠トリト云物砒石ナラン 本草ニ石ノヨアルモノ礬石トアレハ礬石砒石同物ニシテヨハ總名ナリ 今砒石得難シ 故ニ梅毒秘録無益ノ書也

○京師 古方ヲ云人 分兩ヲ云 理未聞 中華ノ人ハ肉食シテ腸胃剛厚也 由テ大劑也 日本ハ東南ニシテ腸胃薄シ 異方法宜ナレハ薬剤モ同シ タトヘハ古昔ハ人參ハ上黨朝鮮也 今ハ唐參 廣東ノ類ナレハ分兩アテニナラス 肉桂ノ如キモ古ハ桂心トテ桂皮ノ真中之厚味ヲ用ユルカ如也

△山脇東洋曰 醫ハ古書ニヨリ先輩ニ聞キ考テ其道ヲ得ヘシ 其道ヲ得テ發明アラハ書傳テ不朽ニ傳ヘシ 是予素意ナリ

一 今ノ中風ト云ハ全ク風症ナシ 是ハ氣逆熱ヨリ發スル者也 痲ナリト 修菴カ云タルハ文字ノトリ違也 痲ハ濕シナト、云テ用文字ナリ今ノ中風ハ風引湯ノ主治ニ熱癰腫トアリ 是カ則今ノ中風也 史記扁鵲カ傳ニ虢ノ太子ノ卒慕ノ病トアリ是也 是則熱ヨリ發スル癰也 偏枯ト云ガ此症也 故ニ予三黃瀉心湯ヲ用ユル也

一 厥ト云ハ内經厥論ニ有ハ胸下ヘツキカケル事也 仲景ハ取違テ四支厥冷ト云タハ仲景ノ文字ノ見違也 上ヘツキ上ルト足ハ冷ル者也 ソレヨリ誤タルモノ也 是ニ熱厥寒厥アリ 總シテ苴ノアル字ハツキ上ル意カアル也 文字ニ昧シテハ書ハヨメヌモノ也

一 華和ナドニ苴胡ハ鈍物ニシテ不堪用 前胡氣味勝レリ 故ニ是ヲ用ユ 前ト苴ト篆字ニテハ能似タリ 書誤タル物モシラス 今鎌倉ノ効ノアルト思フハ苴ノ効也トシルヘシ

一 厚朴 華物氣味勝レリ

一 枳實 上代ヨリ用イシトミヘタリ 列子ニ出ツ 今枳實ハ偽物ニシテ真物ハ一モ不渡 シカシ今渡ル枳ハダイノワカキヲ三ツニワリテ中ヲ除テ兩方ヲ乾タルモノ也 橙モ橘柑モ皆枳ト同類ユヘ氣ヲ下スニハ今ノ枳實ニテ用タル也 故ニ予モ唐ヲ用ユ和ハ不堪用

△脇復所先生 丙子之冬宗教菴ニ來リ道ヲ尋ケルニ孟子ニ由テ講シテ曰 天下ノ事廣大ナレトモ約テ云ヘハ 天地人ノ三也 天地ノ譬ハ卵ノ事大 概合セリ 唐天竺ソレノ道アリ 吾日本ニハ儒仏神ノ三アリ 儒ハ天下ヲ大平ニスル道ナレハ百姓ナドハイラス也 佛ハ真ノ釈迦ノ道ハナ

シ 今ノ佛者ハ俗僧也 佛ハ信ト不信トノ間ヲ行カヨキ也 神ハ水上ノ浮萍ノ如キ也 然ハ今日ノ人ハ儒佛神ノ三ハ捨テ只人ノ人タル道ニ從カヨキ也 シカシナガラ此人道ハ右ノ三道ニ渡ル物也 只此善心ヲ生レ付テアレハ此善心ヲ養ヒ育ルヨリ外ハナキ也 ○孟子曰人皆有不忍人之心云々 忍トハヲタヘカタ井ト云程ノ心ナリ ドウモ人ニツ、ミカクサレヌ心ヲ云也 ○自賊トハ吾身ヲキリクダイテシマウ様ナ物也 ○凡有四端トハ此心ノナキ者ハシヨウコトモナシ 此心ノアル者ハト云心也 ○擴トハコ、デ仁ヲ行ヘハ隣ヘ行テモ仁ヲ行フ事也

○金銀ヲ目ニミネハ欲心ハヲコラス也 ○人ハ天ヨリ良心ヲ生レ付テアル也 天ヨリトハ天然自然ト云事也

## 寶曆七丁丑春又遊京 聞是言

二月八日

東洋先生曰 醫ハ先始ニ病人ヲ見テ死生ヲ分ツヘシ 次ニ病因ヲ定ムヘシ 病因死生分ラサレハ治ヲ施ス事ハナラヌ也 今頭痛ノ人アリ 頭痛ノ藥トテ別ニナケレハ病因ヲ定テ瘀血ナレハ三黃ノ類 外邪ナレハ桂枝麻黃ノ類ノ如ク因ヲ由テ藥ヲ施スヘシ 今証ニ由テ因ニヨラストハ誤也 吉益ナトハ 醫ハ病ヲ治スル者ナレハ死生ハ天ニアリテ 醫ニアツカラスト云ニ至ル誤也

△ 醫ハ漢以上ノ古書ヲヨムヘシ 後世ノ書ニ一目ヲ下スヘカラス 王濤孫真人ナト見識ナク 神仙巫祝ヲ取用タレハ見ニ不足 然トモ千金外臺ニハ古方ノ殘レルアル故コレヲトル也 披河擇金ト云書也 又六經管子荀子ナドノ古書ヲヨムヘシ 古文字ヲ不知ハ不通ノ事アリテ古方ニ疑アリ

内経ト云物晋魏ノ書トミヘタリ 漢書藝文志ニ黄帝内経トアレトモ素靈ノ名ナケレハ他書カモシラス

△医ハ名利名ヲ放テ流行セマイト ハヤラウトソコニ心ヲ不止 只此古方ヲ楽ミ整メサレハ古方ハナラス古今同シ勢ナリ

△梅毒ノ治 養菴ノ説ヨシ 結毒シテ口鼻ナド傷タルニハ又五宝ソモ不捨ヌ葉也 先五宝ソニテ毒ヲ散シテヲイテ後解毒ヲ用ユヘシ 輕粉ハ用ラレヌ物也 粉ニテ毒残りタルノ治シニクキ也 ソレ故此病人三年ノ結毒ニテ鼻ニ膿血ヲ出セトモ虚弱ニテ解毒用ラレヌ故此間五宝ソヲ用テ鼻

治シタル故今ハ當歸建中湯ヲ用ユルナリト強キ其病人ノ脉症ヲミル

△方函ト云ハ吾書タル物ニハアラス 門人長州栗山生カ先年ノ吾門ニテノ聞書也 吾了簡モ今ハ此トハ又違シ事数々也

△分兩ノ事漢ノ法未知 徂徠テキ劑ノ度量書ヲ考合テミルニサヘ不合此二人ハ古今明達ノ人ナレドモ不知 分兩ハ大概知レドモ升合カトカク知ヌ也 古人ノ法ニ水七升ヲ以三升ニ煎 日三度ト云ニテ大概シルヘシ

明人丸散ヲ五錢一服トミヘタリ 養菴モ此ニ由テ一劑ヲ五匁トシテ水ニ合入一合ニシテ日ニ二服ト定ラレタリ 我モ是ト同シテ水ヲ定テ置テ又藥劑ヲ増減スル迄也

△瀉心ノ寫ハ散水アルハアシ、寫ハ涌也 通ト云テ此方ノ物ヲアノ方ヘウツシカユル事也 氣ヲ引下ケカヘウツス事也 便ヲ下ス事ニハアラズ 半夏寫心生姜ナドニテミルヘシ 三黃湯ノ時ハ便ヲ下ス事也 黃ハ煎スル時ハ下ス事也 麻沸湯ニテ振出ス時ハ氣ヲモラス事也

易ニ曰立天道陽得陽立地道柔而陽立人道仁而義

○清祥云六經傳ヲ云疑シ傷寒ニハ始ヨリ熱冷ノ二症ノミ也 熱トハ大陽少陽 陽明ノ証是也 冷トハ少陽 大陽 厥明ノ症是也 始陽証ニシテ

後陰症ニナルトイヘドモ 今病人ヲミルニサニアラス 仲景ハ附子ヲ多用シトミヘタリ 今多不用疑事也 又藥ニ寒熱アルト云タモ合点ユカス 彌寒熱アラハ 強患風アルユヘ附ヲ加フ

附子寫心湯イカン 附姜モ逆ヲシツメ胸ヲヒラク 功甚シトミヘタリ

○五味子甘草ノ如キ分兩ノ通ニテノミヤスシ 一味ニテモ分兩ヲ減スヘカラス

○人ノ一身流通順行也 口鼻大小便道ハ大通也 耳トイヘドモ手ヲ掩テナルハ通氣アル故也 一身ノ勝理モ氣通スル也 今 外邪ヲ受ル時ハ一身ノ通氣ヲ塞クユヘ熱ヲ生スル也 譬ハ火ノ少キ火燧ニ蒲団ヲ幾重モ重タルカ如シ

十一日

△山脇曰傷寒論ハ本ハ六經ヲ分タル物ニテハナカリシヲ晋ノ前後カニ大陽トアルハ大陽 小陽ハ小陽ト分タトミヘタリ 傷寒例辨脉法ナドハ金匱玉函經ノ中ニ有テ叔和ナドノ作ナルヘキヲ牽強シテ傷寒論ノ始ヘ上タモノナリ 今ノ金匱要略モ傷寒論中ニアリシヲ取分タモノトミヘタリ 其證ハ千金ノ中ニ傷寒論曰トアリテ金匱ノ寸ヲ載テアリ 少々古文辞ヲ学タラハ中景叔和ノ語大概明ニ分ルヘキ也

十二日

○吉益曰病ハ一ニ極ル 呂カインノ作 呂氏春秋ニ鬱毒ヨリ諸病ヲ生スル事ヲ云リ 史記扁鵲カ傳ニモ色々古意アリ 鬱毒ニモセヨトカク病ハ毒也 此毒ヲ去カ医也 医ハ病ヲ見テ其症ニ由テ藥ヲ施スヘシ 藥モ仲景ノ藥ニテ事タ

ル也 仲景ハ古方傳來ノ人也 立方之祖ニアラス 一葉ハ本草ニ由テハ不取只仲景ノ意ニ從テ功ヲ定ムヘシ 仲景ノ藥功定メカタキ事甚多シ

我仲景ノ本草ヲ著ント欲シテ三五年ナレトモ未タ成就セス 先伏令ハ心  
下ノ悸ヲ治スル物也 人參ハ心下痞シテ悸スルヲ治ス 黃連ハ胸中ノ悸  
スルヲ治ス 參連伏悸ヲ治シテ功似タレトモ上中下ノカハリアルナレ  
ハ是ニ氣ヲ付ヘシ 又方モ三承氣名ハ同シケレドモ本意ハ違アリ 調胃  
承氣ハ大黃甘草湯ヨリ變ス 七物湯 三物湯 小承氣ナドハ大承氣ヨリ  
来ルトミヘタリ 又藥ニ寒熱温冷ト云事決シテナキ事也 今本草ヲミル  
ニ寒ノ熱ノ冷ノ温ノト皆人々ニヨツテ不定藥アリ 仲景書中厥  
ト云ハ病ノ行ツマツテ毒ノセマツタル症ナリ ソレニ四逆湯ヲ用ルハ甘  
草ヲ以テユルメル事也 緩ル時ハ逆氣メクリテ厥イユル物也 ソレ故薑  
附ヨリハ甘草ノ分兩ノ多キニテ可知也 附子華渡小便浸シテ味効トモニ  
アシ、日本ノ附甚ヨシ 枳實偽物ナレドモ華渡ヨシ 木ハ小便ヲ通ス  
ル物也  
十三日

○清祥曰山脇ニモ梅瘡ニハ六物解ヲ用イ毒氣未盡ニハ再造加叟湯用ユレ  
ハ十二ニシテ半分ハ不解 由テ又五宝シヲモ用ユ 然輕粉劑又可用事可有  
若劑ニ名人アリテ一人モ不治ト云事ナシ 予之ヲ習フ 今又此法ヲ足下  
ニユルスヘシ 輕一錢 筋一錢 梅肉一箇 牽牛二錢 右糊丸茶ヲ衣トス  
細丸茶ヨリマブスガヨシ 一度ニ三分一日ニ三度右六日ニ用ユ 翼七日  
日ニ後方ヲ用イテ輕粉毒並ニ惡物ヲ下ス 巴一分三厘 黃七分 丁子三分  
百草舌五分 右四味糊丸衣銀箔一日一度用盡尤一日忌味噌汁 禁物 蕎  
麥 貝類 油 川魚 辛物 臭物 酒酢 七十日 可忌 右用テ後六物  
解毒湯用ルモヨシ □一錢 芎五分 飯五分 黃 始三分後八分迄 金銀花  
三分 木瓜五分 右水煎服  
○山脇家傷寒不治ノ証 下血 搐搦 笑 遺尿遺尿 右ヲアラハス病人

ハ難治トス 下血ニハ桃仁承氣湯ヲ用テ二人功ヲ得タリ 其外廿人程ハ  
皆死セリ 可付心 搐搦モ持疾痲症ニハクルシカラヌ事モアル也

○中風ト云ハ厥ノ内ニ入ヘシ 始ハ癱ハ顛ナリ 癱ハ間ナリト 注シタ  
レトモ古言ニアラス 故ニ今ハ厥ニ入ル也 卒倒不語參 連 湯ヲ始ニ  
用ユ 後 三黃寫心湯 黃三分 苓連六分麻沸湯ニテ振出シテ一度ニ用ユ  
黃三分以上レハ下リテアシ、心下痞鞭ヲ治スル目付故黃ヲ煎シヌ也  
十八夜

○山脇曰吐法ナケレハナラヌ物也 傷寒論中ノハ未タシカナラス 先張  
戴人ノ説ヨク聞ル也 瓜蒂モ五分ヨリ一匁五分位迄用ユル也 常例蒂一  
錢小豆一錢カヨシ 散ヨシ 丸ハ無功 散ハ内ニ入テ藥氣ノアル中ハ吐  
スル物也 何病ニテモ膈上ニアルハ可吐 シカシ今云 喘息ハ難治ノ病  
也 ○杷子致湯ハ吐藥ノカロキ物也

△脚氣ト云ハ晋以降ノ病名也 日本ニテモ古シ 紫式部源氏ニモアシノ  
キノボルトアリ 脚氣ト云テモ足ノ事ニハアラス 心下ヨリ腹内ニ病根  
アリ 藥ヲミテシルヘシ 多クハ氣ヲ開ク藥也 逆氣カアル故ニ下ノ足  
ガ痛 シビレ痒ナトヲユル也

○防己ハ漢防己ヨシ 漢ハ地名也 石膏ハ汗ヲ発シ又開キ発スル功アル  
ト思ヘ 黃連參ハ大方似タル功アリ

△挾熱利ハ今ノ痢ニ近キモノ也

△文章ハ莊子ト云物古今ノ名文ナリ 日本ニテハ南郭也

南郭死シタラハ徂門ニテモ瀧弥ハナルヘシ此ヨリ上ニナル者未見

△瘧病ト云モノ北国ニハ甚多キ病ナリト云 強按ニ 瘡家瘧病トアレハ  
風犬病ナト瘧ノ類疑ナシ

廿三日

△山脇曰

(半丁ばかり空白)

## 寶曆十庚辰春二月三月在京中間書也

○野村玄桂曰薬方之功如食飯則忽忘饑也

○通之曰毒不劇薬甚有功者也 今用薬不應而無損

若薬應則如願應也

十六夜

○東洋曰医ハ英雄ナラネハ大功ヲ立ル事アタハス 此古方ノ起リハ有馬良牛<sup>(15)</sup>ト云者天下ノ英雄ニテ後西院<sup>(19)</sup>ノ遺勅ノ罪ヲ蒙リシ程ノ人ナリ ソレヨリ天民<sup>(16)</sup>ニ傳ヘラレタリ 渡邊新藏ノ父ハ此良牛ノ門人ナリ 天民ノ曰 我門人ヲミルニ金藏ノ番ヲサスルニ金ヲ盜マル、者斗ニテ金ヲトラレズサキノ金ヲ取リテクル程ノ者ハナイト云レタリ 是英雄ノ氣象ナリ 医ノ君子ハ良山 医ノ英雄ハ良牛ナリ 道作廿歳ノ比傷寒論ヲヨメヨト教ヘラレシ人 松原才次郎 渡邊新藏也 手習ハ渡邊ニテ習レシ也

○ゼ、ニテ原雲庵ニ逢シ時ワレ君ハ脚氣証故六味板粉一灸治ナトモヨカルヘシト云ヘハ雲庵曰板郎灸治イマタ功ヲミスト云シユヘソレハ其方如キ人ノシル事ナラス 板榔モ一劑ニ式勿程用ユレハ効アル也 脚氣ニ灸スル事千金外臺ニ出タレハサノミアシキ云レマシト云ケレハ 雲庵モ口キツシテヲラレケル 君モ急變アリテ二四日ニ薨シケル

十九夜

○兼人ハ一倍スルト云事也 ○天壽不<sup>フタツニセ</sup>貳 天ニモ壽ニモ心ヲト、メス只一心不乱ニ修身ルカ命ヲ此方カラ立ル事也

○五十知天命ハ天カラ命シタ所ヲ性ト云 此性ヲ知コトカ則知天命也ト松原先生ノ云シ一説ナリ 又無至而至者無為而為ト天命ヲ知タト云カ渡邊先生ノ説ナリ 二説存シテミルヨキ也 ○無處而餽之ハ是ハ戒心モナク臆ニテモナクワケモナフヲクルハコレヲ重宝ニセヨト也 君子ハ左様ノ事ハナキハヅ也

○有朋自遠方ハ学不厭教人而不倦ト云場ナリ

自得居士の世にいませし時春なとにとひ来て

ハいと衿もころに打物語らひすなる此春阿ととふらひ来て霊前にさしむかひかくれよみて手向侍る

はかなしや袖も志ふるく春雨のふりしむかしをおもひ出れば

松原先生のかりにと、満りて道の物語の序に文よめといハれければ筆とり上て

語るにも阿らぬなりめや此宿のあなりそ向ふ花のことの葉

廿五日故郷に消息をとて

衿さめにもおもふ心の婦る里にかよひて事をとらぬそなき

渡先生曰

○學問ハ忠信ガタデハ何事モ行モノ也 佐藤次信四十七人ノ者トモ皆忠信ヨリ発シテ其功ヲトケシモノ也 ○人ハ修身ノ処干要也 身サヘ修レハ顔子ノ場ニ居テモ楽ナリ ○退而看其私ハ退ハ顔子カ孔子ノ前ヲ退テナリ 私モ顔子ノ私ヲ孔子ヨリミレハナリ 発ハ発見ノ心也

○視其所以—以ハ用也トテ人ノ心テ何ヲ用ルゾトミル也 由ハ此用ルハ  
ドコカラ由來シキタ事ゾト也 觀ハ廣クミル事也 安ハヲチツク所也  
○山脇曰經濟ニテハ南郭又詳ニシテ大ナルモノ也 熊本候ニ贈ル序ニ見  
ル也 徂徠ノ政談ト云モノ甚詳ルモ也 此レハ今ノ政ヲ云タルモノユヘ  
開板ハ ナキモノ也 公方天下ヨリ徂徠ヘ政ノ義ヲ御尋ニテ書上テ稿ハ  
燒捨タルモノユヘ世間ニハナシ

△南郭カ大東世語ノ出処ヲ尋ルニ皆和書ノ深淵ナルモノヨリ出セシ也  
其中ニ只二事何ノ書ニモナキ事アリ 由テ此事ヲ堂上ノ名家ニ問フニ其  
人手ヲ拍シテ曰此二事服子ハ何レヨリ聞シゾ フシギナル事カナ 此二  
事ハ當家ノ秘事ニシテ他ニモラス事アラヌ事ナルニ扱テハ和學ニ通セシ  
人カナト稱嘆アリシトナリ

○古ニ巫醫ト云シ事尤ナル事カナ元來古代ヨリ醫ハ腹内ヲ察シテ病ヲト  
ナフモノ、如シ 故ニ巫醫ト云シトミヘタリ

○医道ハ古代ニヨリテ近代ヲ云ヘカラズ丹溪已後ハ云ニタラズ 皆下手  
ナリ 下手ヲ相人ニハトラレヌナリ

○消渴ハ熱症ナリ 參白虎  
原泰菴之男雲菴之甥

○原洲菴曰医ハ議論ヲ詳ニ極メサレハ病ヲ見ル事アタハサルモノ也 只  
古人ノ論説ヲ念比ニミテ議論ヲ極ムヘキ也 此中ヨリ病モワカリ術モ出  
ルモノ也 今ノ古方家ト云モノ、術ハ偏カト思ル、也

吾ハ父泰菴トハ義絶ナリ 父ハ治ハ下手ナリ 只経絡ノ事ハ詳ニ悉ク人  
ナリ 江戸ニアル伯父雲菴ハ治術上手ナリ 人ノ氣ノ付ヌ所ヲ氣ヲ付テ  
ミル人ナリ 近年勞瘵ト云病人ノ中ニ痔ヨリ起ル人アリ 是ニ氣ヲ付テ

ミルヘシ 痔ヨリ起リタル病人ハ痔熱ヨリ起レル故ニ痔ヲ治スレハ治ス  
ルモノ也 是勞ヲ治スル一術ナリ ○雲菴ハ文字モヨメル人ナリ

辰二月四日大阪ニ着

○二月五日堂島仁亭ニ至リ老先生御兩所仁亭ニ四年振ニテ対面御教誨ト  
モ承ル 老先生曰ク 修身而俟命ト云 此修身ノ所也 只一善ニテモ得  
タイノト思テ拳々トシテ務メサヘスレバ道ハ成就スル事也 當ニ聖人  
ニ至リタイト思テスヘキ事干要ナリ

術モ仲景ヲミルニ古方ヲ好ミ病人ニ就キ是ニハ何ノ藥ト効アル物ヲ撰  
試テ用タリ 畢竟ハ故ヲミテシタルモノ也 今ノ妙藥ト云モノ是同シ  
モノ ○仁亭云医モ孝悌ヲ本トシテ行サレハ術ニ達スル事ナラサルモノ  
也 孝悌ニ術ヲツトムヘキ也 天下ノ万端万事此孝悌ヲ外ニシテ成シ事  
ワレ未タコレヲ不聞 寧良相タラスンハ良医タラント云タモ医ハ仁術ヲ  
行フニ宰相ニ繼テハ近キモノナレハ范文正公モ云レタモノナリ 只孝悌  
ヨリ始ムヘキナリ  
八日

○老夫子曰專心到志ト云処工夫スヘキ事也 ケ様ニナケレハ何事ニテモ  
手ニ入事ハナラヌモノナリ

## 道説

廿九日 夜 渡邊先生曰

○春秋ハ孔子ヤム事ヲ不得ノ術也 史ハ天子ノナスヘキ書ナリ ソレヲ  
孔子ハサン定セシユヘニ罪吾者夫則春秋カ談アリ 詩ノ可怨ハ人ノ實情  
也 怨ル中ニシタウ心アル也 舜ノ怨慕是也 ○大學ハ天民曰竜頭蛇尾  
○家語ハ礼記ノ類ニシテ秦漢ノ間ニ偽作セシ書トミエヘタリ ○中庸モ

竜頭蛇尾ノ類也 天民ノ曰トカク人ハ律義ナル人ガヨキモノ也 發明ト云ハキズ者也 ○仁洲曰十一歳ニシテ文章ヲ書タルヲミテ 渡邊ヘ向テ仰候ハアレヲイカメシク思フヘカラス 學問ハアノ所ニハナキモノ也ト云レシトナリ

○三月十八日老夫子御上京十九日朝示教ナサレ候ハ其方此程在京至極殊勝ナリ 志モ立テ我ニ於テモ片腕ト思ハカリナリ 帰国ノ後モ只工夫ヲコタルヘカラズ

○只毎日ノ論孟ノ中二三章程必ヨムヘシ イカヨウニ闊クトモ此事必忘ルヘカラズ 此則上達ノ工夫ナリ カクスル時ハ志モ不墜善事ニモス、ムモノ也 敬輔秀治ニモ此通りツトメサセタク思フナリ ○只我身ニスル事也徳ヲ身ニツム時ハ何国ニ行テモ行ル、モノ也 小出伊勢ノ守ハソノベヲ取りヤル ソコデソノベガ繁昌スルト歌フタモ此事也 又古キハヤリ歌ニモアユハ瀬ニスム鳥リヤ木ニトマル 人ハナサケノ下ニスムト云タモ面白キ事也

○論語ニハ注ハナラヌモノ也 孔子ノナサル、所今ヨリハカルニ誰ニ仰ラレタヤラ何ノ為ニ云レタヤラ知レヌ事多シ 今ヨリ註ヲ加ルハ皆面々ノ推量億説ナリ 聖人ノ語ハ何ヲ以テアテ、モ必合フモノユヘナリ

○道ハ近ニアリ 高遠ニ求ムヘキニアラズ 宋儒陽明象山ナド皆道ヲ遠ニ求メタルモノ也 宋儒ハ易ニダマサレタルモノ也 今日才治郎敬輔求吾カヨウニ物語スル所行フ所則是道ナル事ヲシラサル故ナリ ○只日々仕ナレル事ナリ 傷寒論モ仲景ノ常ニナサレタ事ナリ 頭痛惡寒發熱ニハ桂枝湯ヲ用レハ効アル也 只此道ヲスレバ早速ナル処ガ即道ナリ ○不明于善則不誠身善ニ明トハ善惡ガ黑白ノ如クシル、上デ善ニ移リテスルデ身ニ誠ニナル也 誠ト云ハ親戚死シテ涙ノコボル、処ガ即誠ナリト

シルベシ ○工夫ハ曾子ノ如スベシ 三省ハ曾子ノ工夫ナリ ホコル 勿<sub>レ</sub>善ハ 顔子ノ仕覚タ処ナリ 車馬勿憾ハ子路ノナサレタ処ナリ

○一日ノ中翼子ノ剋ト云タハ誤ナラン 古語ニ子ニ臥シテ寅ニ起ルト云ニテ知ヘシ 孔子ノ夏ノ時ヲ行ヘト仰セラレタ 至極尤ナル事カナ 春暖ナルモノヲ周ノ如ク十一月ヲ正月ニスルハ春寒シテ正時ニハアラヌヤウナリ 時ハ夏カヨキト孔子ノ仰ラレタハ至極尤ナル事トモナリ

○忠ハ中心ニシテ実心ナリ 信ハ人言ニシテ偽ナキモノナリ

○廿五日発足ノ時松原先生又仰ラレ候ハ學問ハ只身ニ仕習レル事也 此孝ト悌トヲ朝夕ヨリノツトメ天下ノ善トアル程ノ事ヲ好テ人ヲ不便可愛ト思テスル事也 其放心ヲ求ト云タモ入テハ孝出テハ悌ノ処テ是ハ大概ヲ云タモノ也 曾子ノ學問ノシカタ至極ヨキナリ 人ニ問ズ只我身ニシナレル事干要ナリ 天下ノ中一郷一村ヲ治テモ其人ガ出ルト其マ、修ルデナケレバ學問デハナキ也 トカク其人ノ徳ニアル事也 ○孔子ノ仁ト云タハ成就シタ上デ廣大ナ事ナレドモ孟子ノ仁ハ人也 仁ハ人ノ心ナリト云タモ同シ事也 下學シテ少々ノ善ヲツミノスル時ハ必上達スルナリ

△直海元周家藏藥品之内并家園之薬

○龍宮ノ鶏 魚類也似鳥 ○アヤカシ 魚也背ニキサアリ 長一尺二三寸ハカリ

○鳳凰卵 大サクワリンハカリ 青白也 ○鮓答 三種 ○砒石 赤白 二種

○薑石 ○白石脂 ○花文石 ○石卵

○金銀銅鐵錫之類

此外 金石類二百品許視之

八丈島

○アシタバ草 即鹹草

○薇苔外二三種 ○花イカダ ○前胡

○續断

青蓮院宮以呂波傳授

は  
以呂波仁保皿登知利奴留遠和加與太禮曾門祢奈良武宇為乃於久也末計不  
こえ

古衣天安左幾由妙美之恵比毛世寸  
さき

石原田清茂 村上昌言傳授焉

庚辰之春 於東山圓山源阿弥方丈也

## まとめと考察

宝暦二年から二年間 京都において初代松原一閑齋に学んだ講義録『醫道聞書(上巻)』と、宝暦六年から十年にかけて、江戸、京都、姫路の当代一流の名家より学んだ講義録『醫道聞書(下巻)』の翻刻を行った。

教えを受けた先生方は、松原一閑齋、望月三英、姫路 加藤宗因、志賀委心、山脇東洋、吉益東洞、渡邊毅等である。これは、当時の古方派の大家であり、この時代の医家の診療、治療法、また医師としての心構え等を知る上で貴重な講義録である。

筆者は、本書を読む前は、合田強は、望月三英や松原一閑齋の教えを受けたのみにと、考えていたが、古方派としては別の学灯の山脇東洋、吉

益東洞などの教えを受けたことがわかった。さらに山脇東洋の門人であった永富独嘯庵とも交流ができたと考えられる。強は宝暦十二年に長崎に修行に行く前に、赤間関で獨嘯庵を訪れた。さらに、長崎から讃岐に帰る熊本の宿で、再び独嘯庵と邂逅し、独嘯庵に長崎行を勧めた。獨嘯庵は吉雄耕牛を訪れ、阿蘭陀医学を学んだ。

漢・蘭折中派の祖は山脇東洋とされている。しかし、実際に蘭方医学を学び、医療に取り入れたのは、東洋の弟子たちである合田強や永富独嘯庵である。また、独嘯庵の乳癌の手術に関する記載は、後の蘭学者や華岡青洲などに、大きな影響を与えたと考えられる。

## 参考文献および注釈

(1) 富士川游『温恭合田求吾先生』中外医事新報 一二三九号 一〇九頁 一九三六年(昭和十一)

右の文献から略歴をまとめた。讃岐国豊田郡和田浜生まれ(現香川県観音寺市)。父は合田伝右衛門吉盤。弟は合田大介(蘭齋)。名は強、字は千之、通称求吾、温恭、号は巨鱈、鱈山。幼少の時、合田又玄、高橋柳哲について医を修め、宝暦二年(一七五二)二月京にて松原一閑齋に医と儒を学んだ。宝暦六年(一七五六)江戸にて望月三英についても学ぶ。その後、長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後、宝暦十二年(一七六二)一月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧めめる。墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜。

(2) 呉秀三『松原一閑齋先生及其子孫ニ就キテ』呉秀三全集 一卷 三六二―三六五頁 思文閣出版

右の文献を基にして松原一閑齋の略歴をまとめた(原文はカタカナ)。

初代 松原一閑齋。名は維岳(これをか) 通称才二郎。(幼名 仁重郎 壮年の頃丹治 後 才二郎) 一閑齋は其号。熟号を成章堂又は盈科室と云う。元禄二年一月十日(一六八九)生。明和二年五月二十八日(一七六五)京都に於て七十七才にて没せらる。

先生 性 温厚英邁にして父母に事えて孝謹なり。幼より大志あり。夙に王守仁の学を信じ知行合一、実践躬行を主義とし一も空言虚譚なし。志を經濟に専にし天文、地理、数学に精く、又戦陣のことに通じ、最も擊劍に長じ、中村水月流の奥義を承く。(中略) 退きて医術を修め、業成りて、後、京都に移住す。其学 張仲景を宗とし、李朱後世の妄説を排撃し一時は世上に容れられざりしも識者之を信するもの少からず。治を請う者漸く多く、門前に滿つるに至り、海内 其名を伝う。業を受くるもの数百人。

(3) 片桐一男『江戸の蘭方医学事始 阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門 耕牛』丸善ライブラリー 二〇〇〇年(平成十二) 二二一〜二四〇頁

右文献から吉雄耕牛の略歴をまとめた。

享保九(一七二四)生 長崎 寛政十二(一八〇〇)死 長崎

江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸佐衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩斎、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に入入りして、寛保二(一七四二)年、一九歳で小通詞、寛延一(一七四八)年には大通詞となった。

(4) 吉雄作次郎(永純)

享保十年(一七二五)生まれる。安永六年(一七七七)死亡 五十三歳

江戸中期の阿蘭陀通詞。諱は永純。阿蘭陀通詞吉雄藤三郎の子で幸左衛門の弟。別家をたてる。寛保二年(一七四二)稽古通詞、宝暦八年(一七五八)小通詞末席、明和三年(一七六六)小通詞並、同八年小通詞助役となる。安永六年十月四日歿。明和八年九月に「由緒書」を提出している。子は左七郎。(片桐一男) 洋学史事典 日蘭学会編 昭和五十九年 雄松出版

(5) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 卷三』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十二卷 一号 九二〜七五頁 二〇一六年(平成二八)

(6) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 卷四』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十三卷 一号 一四六〜一三三頁 二〇一七年(平成二九)

(7) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 五』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十三卷 三号 三六〇〜三五二頁 二〇一七年(平成二九)

(8) 板野俊文、田中健二 合田強の『紅毛醫述 卷一』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十三卷 四号 五二八〜五一四頁 二〇一七年(平成二九)

(9) 板野俊文、田中健二 合田強の『紅毛醫言 卷二』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十四卷 一号 一〇四〜八六頁 二〇一八年(平成三十)

(10) 板野俊文、田中健二 合田強の『紅毛醫言』の現代語訳 医譚 通巻一九号 一〇二〜一二三頁 二〇一五年(平成二七)

(11) 佐々木礼三 昭和四十一年新修高松市史 第二卷 高松医学医事史 七三五頁 望月三英(二六九七〜一七六九) 父雷山も藩医であった。遠慮なく、思うままに口にだして、用いられず。丸亀藩に仕えた。のち三英は、幕府医官望月家を継ぎ、お番医師、法眼にもすすんだ。幕府の医官であったが、元文四年高松藩主頼恒(第四代)の病気を診察した。しかし同年九月十六日藩主は二十歳で死去した。親藩だったからである。

將軍吉宗に、秘庫の方書をみることを許されたほどの、医家であった。明和六年十一月四日死去。歳七十三。浅草の壽松院に葬られた。

(12) 山脇東洋 宝永二(一七〇五) 二月一八日 丹波、龜山 生 宝暦十二(一七六二) 八月八日 京都 没

江戸時代中期の医師。日本で初めて官許を得て人体解剖を行なった人。名を尚徳、通称道作、字は玄飛または子樹、号は移山のちに東洋という。院号は養寿院。医師清水東軒の長子に生れたが、父の師で宮中の医官山脇玄祐の養子となった。儒者荻生徂徠に私淑し、後藤良山に古医方を学び、延享四(一七四七)年『外台秘要』二十四巻を翻刻した。中国古来の内景図(内臓図)に疑いをもち、人体解剖への熱意に燃えていたところ、宝暦四(一七五四)年二月七日京都で若狭藩医原松庵らが死刑囚の獄中解剖を見ることを許され、東洋にもその場に立会う機会が与えられた。その所見や感想、刑死体への感謝の意、友人、弟子の書簡をまとめて『蔵志』(二冊、一七五九)を出版した。これが日本最初の人体解剖の記録である。ブリタニカ国際大百科事典

(13) 吉益東洞 元禄十五年二月五日(一七〇五年三月三日)〜安永二年九月二五日(一七七三年一月九日) 安芸国山口町出身の漢方医で、古方派を代表する医であり、日本近代医学中興の祖である。名は為則、通称は周助。はじめ東庵と号し、のち東洞。『傷寒論』を重視するが、その中の陰陽五行説さえも後世の竄入とみなし、観念論として排した。三十歳の頃「万病は唯一毒、衆薬は皆毒物なり。毒を似て毒を攻む。毒去って体佳なり」と万病一毒説を唱え、すべての病気がひとつの毒に由来するとした。この毒を制するため、強い作用をもつ峻剤を用いる攻撃的な治療を行った。朝日日本歴史人物事典

(14) 渡邊毅 一六八九〜一七六〇 元禄二年に儒医・渡邊謙斎の男として生ま

れ、名は毅・孝恭・存泰・通称を新蔵といい、弘堂・霞谷と号した。

元禄十年（一六九七）、伊藤仁斎の門に入り、仁斎・東涯父子に従学した。後、並河天民に従い、仁斎の説を批判し、自説を主張した。天民の遺稿を編纂し、天民墓表の撰文も弘堂の手になる。寶暦十年に歿す、年七十二。著す所、論語臆、孟子臆等あり。ブリタニカ国際大百科事典

(15) 有馬涼及 玄哲の二男で承応二年（一六三三）に生まれる。元禄十四年（一七〇二）六十九才で没す。その行状は、最初に宝井其角の『類柑子』の巻一（愛知県立大学図書館貴重コレクション）五十四丁から五十八丁に、「寝て見るさくら」として、載っている。後に同様の内容が、伴高蹊の『近世畸人伝』や浅田宗伯の『皇国名医伝』に載せられるが、以下に要約する。

後水尾天皇の病氣を、いならぶ名医の云うことを無視し、承氣湯で治した。御西天皇の呼び出しを受けたが、暮の途中ということで「まいらざりし」により遣勅をうけた。

一日嵯峨の角倉家に行く途中、大きい桜を見て、購入するには高価であったが、角倉家に金を借り、購入、家に運ばせたが植えるところがなかった。横たわらせておき、寝て見たという。

百金を投じて青井戸茶碗を得た。後に涼及井戸と命名され、現在は根津美術館所蔵となる。

(16) 並河天民 伴高蹊の『近世畸人伝』をもとに、略歴を作成。一六七九〜一七一八 江戸時代前期〜中期の儒者。

延宝七年五月二八日生まれ。並河誠所の弟。伊藤仁斎にまなび、仁斎の説をつぎながら、疑問箇所を批判。孔孟の正義は経国済民にあるとし、幕府に蝦夷地を日本に帰属させることを献策した。享保三年四月八日死去。四十歳。京都出身。名は亮。字は簡亮。著作に「蝦夷地大地図」「かたそぎの記」など。天民は追諱（天民墓表による）。

(17) 松岡尚則 他十九名『並河天民の師―有馬涼及について』日本東洋医学六三卷 四一七〜四二三頁 二〇一二年（平成二四）

有馬涼及と有馬良牛の、関連に関しては、この論文の、四二三頁に以下の記載がある。参考にされたい。

『南紀徳川史』で、有馬涼及が詔応に応じなかったのは御西院とある。『医道聞書』に「後西院の遺勅を蒙りし程の人」という記載があることから、有馬良牛は有馬涼及、その人で良いと考えられる。（中略）涼及も良牛も「りょう

きゅう」とかなで開くことができ、この点からも涼及と良牛が同一人物と考えることが出来る。」

(18) 暨の下が巫である。この所以は寶暦十庚辰春二月の「山脇曰」の部分に書かれている。巫医とはシャーマンを意味する漢字とある。

(19) 後西天皇（こさいてんのう）寛永十四年（一六三八）十一月十六日生まれ。貞享二年（一六八五）二月二十二日死去。四十九歳。江戸時代前期、第百十一代天皇。天皇在位一六五五年〜一六六三年 後水尾天皇の第八皇子。母は藤原隆子（逢春門院）。異母兄の後光明天皇のあと即位。父の上皇が院政をおこなう。江戸の明暦の大火、御所炎上、諸国で地震、風水害がおこるなど、凶事がつづいたこともあって讓位。東山御文庫の基となる御所の記録の副本をつくらせた。墓所は月輪陵。幼称は秀宮。諱は良仁。別名に高松宮、桃園宮、花町宮。ブリタニカ国際大百科事典